

「わかった!」「できた!」を実感できる授業をめざして

「勉強が楽しい!」「友達がいるから楽しい!」そんな子どもたちの声が聞こえる学校になってほしいですね。そのためには、全職員が同じイメージをもって授業にのぞむことが大切です。

授業を通して、子どもたちの自尊感情を育み、学び合う学級集団をつくっていきましょう!

1 学習規律を徹底する

学力の向上を図るためには「学び合う集団づくり」が不可欠です。そのためには、子ども主体の授業づくりとともに、落ち着いた環境をつくらなければなりません。そこで、全職員で共通理解し、担任以外の先生が授業をしても同じ環境で学習ができるように、最低限の学習規律を実践していきましょう。

- 筆箱の中身は必要最低限にする
- 授業前に学習の準備をする
- 教科書、ノート、筆箱等の置き方を守る
- 授業前と授業後は「立腰」のかけ声で10秒程度「立腰」をする
- 開始時刻になったら、立腰をする。
- 相手や場に応じた言葉遣いで話す
- 授業で使ったものは、決められた場所に戻す



2 授業の主役は子ども

先生はいろいろな知識を豊富にもっています。その知識を「子どもたちに話したい伝えたい」という思いが強すぎるあまり一方的に説明ばかりしてしまうと、先生は気持ちがいちがよいかもかもしれませんが、子どもの「考える力」は育まれません。「考える力」を育むためには、自分の考えをもち、試行錯誤したり話し合ったりして「なるほど!」「できた!」というような経験を積み重ねることが大切です。

子どもたちに「考える力」を育むためには、ドラマの筋立てのように構想して、授業の構造化を図ることが大切です。まず、授業の展開と大まかな子どもの反応を予測します。次に、山場となる場面を焦点化します。この山場が、子どもたちに考えさせる場面です。そして、この山場へどのようなアプローチができるかを考えるストーリーが大切なのです。

図工の学習例に挙げてみます。導入で提示した2つの参考作品をみて、どちらが好きかを選び、その理由を発表させたとします。そこで、大切なことは「比較鑑賞して浮かび上がらせたいことは何なのか」ということです。子どもたちが発表して挙げた理由を整理して「形」「色」「バランス」など制作する際の観点を導き出します。「何を考えさせたいのか」を明確にもち、整理することが先生の役割です。

国語の書く学習でも同じようなことが言えます。「モデル文」を提示することで、子どもたちに考えさせたいことは何かということをもっておく必要があります。

比較・矛盾等を生じさせ、問題を際立たせることで、子どもは問題をはっきりとつかみ自分の立場



を明確にする必要に迫られます。立場をはっきりさせることで、どの子ども授業に参加することができます。自分の立場をはっきりさせ、考えをもたせることでグループ学びの意義が生まれます。「友達は どう思っているのかな」「私は〇〇さんと立場は同じだけと理由が違う。そういう考え方もあるのか」など自分の考えを広げたり深めたりすることにつながっていきます。

3

神埼小の授業スタイル

神埼小では、単元で「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」「どんな力が身に付くのか」を子どもたちにわかりやすく伝える学習課題を設定しています。学習課題は、**A 指導事項**（学習指導要領の指導事項から『何が身に付くのか』）、**B 思考操作**（関係付ける、比べるなど『どのように読むのか』）、**C 言語活動**（『何を学ぶのか』）を組み合わせ考えてみます。例えば6年生教材文「やまなし」では、「情景が目浮かぶようなすばらしい表現について自分の考えをもつ学習をします（**A 指導事項**）。色、出てくる物、構成に着目して（**B 思考操作**）、挿絵の紹介文をかこう（**C 言語活動**）」という学習課題の設定が考えられます。今年度はC言語活動に力点を置いて、取り組んでいきたいと考えています。学習課題をもとに、自分が疑問に思うことや深く考えたいことを「私の問い」とし、「私の問い」を解決していきながら学びを深めていきます。子どもたち1人1人が、それぞれの「私の問い」を自分のペースで解決する、新たな浮かんだ疑問をもとに「私の問い」を更新していく姿は、理想的な姿だと思います。しかし、その姿に至るまでは、ステップを踏んで指導をしていくことが必要です。下記のように段階を踏んで学びを重ね、『私の問い』を解決していくことが楽しい」「筆者の伝えたいことがわかった」という思いをもつと、自分から「私の問い」を解決していくことができるようになるでしょう。その姿こそ、読むことを楽しむ姿だと考えています。

「私の問い」を解決していく授業スタイルの3ステップ

ステップ1 教師と選んだ「私の問い」をみんなで考える。

- ①学習課題をもとに、「私の問い」を立てる。
- ②「私の問い」を一覧にし、共通点や類似点などをもとに、「私の問い」を分類したりまとめたりしながら、学習課題にふさわしい「私の問い」を選ぶ。
- ③1時間に1つの「私の問い」について、みんなで考える。グループや全体の場で意見を出し合い、「私の問い」を解決する。

ステップ2 複数の「私の問い」の中から、自分が解決したい「私の問い」を選び、考える。

- ①学習課題をもとに、「私の問い」を立てる。
- ②「私の問い」を一覧にし、共通点や類似点などをもとに、「私の問い」を分類したりまとめたりしながら、学習課題にふさわしい「私の問い」を選ぶ。
- ③1時間に複数「私の問い」を出し、興味がある「私の問い」について考えをもつ。同じ「私の問い」を選んだ人とグループを構成し、「私の問い」を解決する。

ステップ3 自分が解決したい「私の問い」を考える。

- ①学習課題をもとに、「私の問い」を立てる。
- ②「私の問い」を一覧にし、学習課題と関連する「私の問い」を選び、解決する。
- ③新たな疑問や深く考えたいことをもとに「私の問い」を更新し、友達と考えを交流しながら解決していく。

先生はいろいろな知識を豊富にもっています。その知識を「子どもたちに話したい伝えたい」という思いが強すぎるあまり、一方的に説明ばかりしてしまうと、子どもの「考える力」を育む機会をうばってしまうこととなります。「考える力」を育むためには、自分の考えをもち、試行錯誤したり話し合ったりして「なるほど!」「できた!」というような経験を積み重ねることが大切です。

そのためには、グループ学びを効果的に用いることが有効です。メリットとしては

- ①少人数で活動できるため、緊張感が和らぎ、気付いたことや考えたことが言いやすい。
- ②一人ひとりの発言機会が増えることで、自分の考えを表すことができる。
- ③意見を出し合うことで、思考が促され個々の考えが整理される。

ということが挙げられるでしょう。

グループ学びを有効な手立てとするためには、グループ学びの基本の1、2、3を意識して指導に取り組むといいでしょう。

基本1 グループ学びの意図やめあてをはっきりさせる

今からするグループ学びは「考えを広げる」のか「考えを深める」のか、グループですべきことをはっきりさせてのぞませることが大切です。「考えを広げる」なら「グループで考えを5つ出しましょう」とか「グループで伝え合って理由を1つは増やしてください」などの指示が必要です。また「考えを深める」なら「考えを出し合って意見を1つにまとめてください」「1番納得できる考えを1つに絞ってください」などの指示が考えられるでしょう。いずれにしても、子どもたちが何のために話し合いをするのかを明確にすることが大切です。

基本2 コミュニケーションの基本を徹底する～学び合う集団をつくる～

○ 意識して相手の目を見る

聞くときだけでなく、話すときにも話し手の目を見るように促します。日直で学級全体の前に立たせ立腰を呼びかけるなど、人の目に慣れるステップを踏んで、子どもたちの抵抗感を少なくします。そうすると、発表にもなれてきます。

○ うなづく・あいづちをうつ

相手の間や呼吸に合わせてうなづく、あいづちを打つ指導を行きましょう。うなずいたりあいづちを打ったりすることで、話し手が話しやすくなります。すると、会話のテンポや流れがよくなります。学級全体で「みんなに話をするのはいい気分だなあ」という雰囲気づくりが大切です。



基本3「ステップアップ」しながら指導をする ～学び合う集団をつくる～

グループをつくって「さあ、話し合ってください」と言われても、子どもたちは戸惑うばかりです。まずは、隣の席の友達と考えたことを交換して読み合ったりグループで意見を出し合ったりすることからはじめましょう。一般的にグループを構成する際は、3人が好ましいといわれています。意見を出し合う場面では、話をしている子どもの方を向いて、うなずいたり「あ、同じだ!」「〇〇は同じだけど理由が少し違うな」などつぶやいたりしている子どもを称賛しましょう。

「こういう反応がいいことだ」ということを学級全体に価値づけていきます。

意見を出し合える雰囲気がつくれたら「意見を出し合うことが上手になったね。では、話し合いのレベルを上げて挑戦してみよう」と伝え、確実にステップアップしていることを実感させていきます。それができてきたら「今日は『まとめ型』の話し合いをしてみましょう」と伝え、さらに段階を進めていきます。

「まとめる」ということは、「複数の考えを付け加える」「複数の考えを、別の言葉に言い換える」など子どもたちに何をすべきなのか、具体的に提示する必要があります。子どもたちが「グループ学びは楽しい」と思えるように、段階的に、そして具体的な手立てを講じていきましょう。



5 全体交流の充実

どの教科でも、グループ学びの後に、学級全体で話し合う場面が設定されることが多いと思います。この全体交流は、出された考えを整理したりまとめたりするために大切な場です。先生と限られた子どもだけのやりとりや先生にとって都合のよいつぶやきだけを拾って進めていくと、学級全体の話し合いとしては低迷してしまいます。その結果、子どもの「考える」機会をうばってしまうことになりかねません。この場では「発言の質と量」が必要です。話し合いを活性化させるためには、先生が「全体交流で子どもたちに考えさせたいことを明確にもつ」ことが大切です。スムーズにまとめにつなげるためにも、先生の適切な指導が必要です。

まずは、聞く構えである「認め技」「確かめ技」などの聴型を身に付けることが大切です。

学年	1・2年生 (低)	3・4年生 (中)	5・6年生 (高)
認め技 (聞く力)	<ul style="list-style-type: none"> うん、それで・そうそう へえ、そうだね。 いいです。 	<ul style="list-style-type: none"> ・そうなんだね。 ・へえ。 ・なるほど。 ・いいね。 ・いいと思います。 	<ul style="list-style-type: none"> ・そうだね。・なるほど。 ・確かに。・納得です。 ・その考えはいいと思います。
確かめ技 (応じる力)	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇さんは～って言ったけど、 ・〇〇さんは～と言いましたね。 ・〇〇さんが言ったことに質問です。 	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇さんが言ったことは～だということですね。 ・〇〇さんは、それは～ということですか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇さんが言ったのは～ということですね。 ・〇〇さんが言ったことを言い換えると～ということですね。
提案技 (話す力)	<ul style="list-style-type: none"> ・私は、…だと思えます。 ・私は、□□がいいと思えます。なぜかという、 	<ul style="list-style-type: none"> ・私は、〇〇だと思えます。 ・私は、□□がいいと思えます。理由は、…だからです。 	<ul style="list-style-type: none"> ・私の考えは、〇〇です。その理由は… ・私は〇〇だと思えます。たとえば、…

- ① 聞く力…聞く力は、相手を受け入れる力であり、相手の話を受容的に聞くことができる力
 - ② 応じる力…相手のことばを受けて返したり、相手のことばに関連付けて発言したりすることができる力
 - ③ 話す(伝える)力…自分の思いや考えを相手に伝える力
 - ④ はこぶ力…話し合いをまとめとりととらえ、目的に照らして筋を意識して話し合うことができる力
- * 基本技()内は、求めたい対話の力

応用技（ ）は求めたい対話の力

*挙手の際に【似ています】【付け加えます】など、言って手を挙げることで、立場を明らかにすることができます。

学年	1・2年生（低）	3・4年生（中）	5・6年生（高）
広げ技 (応じる力)	・～さんと似ています。 なぜかというと	【似ています】 ・〇〇さんと似ていて、私も～ と思います。理由は、…です。	・Aさんと同じで、私も…です。 理由は〇つあります。
	・〇〇さんにつけくわえます。	【付け加えます】 ・付け加えて言うと…	・〇〇さんに付け加えると ・詳しくいうと、たとえば…
	・～さんとちがいます。 なぜかというと	【他にもあります】 ・私はちょっと違います。理由は… です。	・Aさん～と言いましたが、私は 違って…と思います。理由は、(〇 つあります。)
切り返し技 (応じる力)	・そうかなあ…でも、 よくわからないので、〇〇さんの 考えを聞かせてください。 ・〇〇さんの考えとはちがって、 私は～だと思えます。	【〇〇さんに切り返します】 ・〇〇さんは、どうして～だと思っ たのですか。 ・〇〇さんの考えと違って～だと思 いますが、どうですか？	・～についてAさんは、…と言いま したが、私は〇〇のほうがいいと思 います。どうですか？ ・～については、私はそうは思わな いのですが、もう少し詳しく聞かせ てください。 ・やっぱり、〇〇ではないと思いま す。なぜかと言うと…、
まとめ技 もどし技 (はこぶ力)		・AさんとBさんの考えはまとめるこ とができると思います。 なぜかというと… ・まとめて言うと… ・AさんとBさんは、〇〇が…の ところで違います。	・まとめると～ということですね。 ・つまり～ということだと思いま す。 ・今までのことから〇〇だと考えら れます。(予想されます。) ・AさんとBさんの考えは…のこ とで似ていると思うので、～のよ うにまとめられます。
	・話のなかがちがうと思います。	・話がずれたので話をもとにもどすと	・論点がずれたので、話をもとに もどします。

6 学びを積み重ねる

「振り返り」を書くことで、45分間で学んだことを自分で整理し、小さな達成感を得ることができます。また次の学びへと意識をつなげることができます。この「振り返り」を積み重ねていくことで、子どもたちの学びに向かう姿勢が変わってきます。3つのポイントをもとに、子どもたちが学んだことを書き表す力を育てていきましょう。

STEP1 なれるまで毎日書く。

『振り返り』を書かせることができなかった」「書かせる時間がない」などの声が、多くの学校で聞かれます。そのためには、最低でも以下の3つの手立てが必要です。

- ① 授業時間を逆算して考えること。ふりかえりの時間は最初8分程度、なれたら3分程度で書けるようになります。
- ② 教師がしゃべり過ぎないこと。子どもが発言できるように発問を考えたり小集団活動を効果的に用いたりすることが大切です。低学年は、まずは『振り返り』を言えそうな子どもに言わせる」ということをしばらく続け、学級全体に「振り返り」の意識をもたせてから、全員に書かせるとうまくいくと思います。
- ③ 他教科でも書く。算数や社会等、比較的書きやすい教科で、書かせると慣れていきます。

STEP2 「ポイント」と「型」をもとに書かせる

「わかったこと」を書くときは具体例を挙げながら書かせるといいですね。例えば、めあてが「本論に

つかわれている資料の効果について考える」では「写真には読み手の興味関心を高める効果があるということがわかりました。また、棒グラフがあると文章に書かなくても一目でわかるよさがあります。」など、めあてを意識して書かせるとよいですね。(6年東京書籍 教材文『町の幸福論』より) 2～3文程度で書かせるとよいと思います。

STEP3 授業の前に、前時の「ふいかえり」を紹介する

授業の前に子どもたちの「振り返り」を紹介します。例えば「Aさんの振り返りを紹介します。『物語を構成するときは、起承転結を考えることが大切だということがわかりました。また、文末表現を同じにしないことや体言止めを使うと読みやすいことがわかりました。』と書いています。そこで今日は、前の時間に学習したことを生かして、構成メモをつくりましょう。」(6年『物語をつくろう』より) というような展開が考えられます。このような学習を繰り返していくと、学びの連続性が生まれ、1時間1時間の学びが積み重なっていきますね。

参考文献「子どもと先生を育てる授業のABC」(日本文教出版)
「話したくなる技」(本庄小学校研究発表会資料)